

丁酉歳十二支会例会に参加して「雪の金鶏山に登る」

山上皓一郎・記

「私は何度も心の中でつぶやく。元気な中にもっと登らなくてはと次第に欲張りになってくる。」

沢野ひとしの言葉

思いもしない今冬一番の寒波に襲われ、米寿の歳に雪山には十年余りも登っていない真冬の金鶏山に登ることができた。

めっきり体力が衰え山にはもう登れないと思っていたが、今年も息子、娘とその婿等が同伴してくれたお蔭で十二支会に参加しそれも雪の山に登ることになった。

初めは計画書にあったハシガミ林道の峠のB地点から登り、A地点に降りると決めていたが、林道の雪が深くB地点に車が登れないのでないかと岐阜の方から教えられ、思案のしどころとなっていた。

標高差140mなら何とか挑戦出来るが、未知の標高差320mのA地点からでは、多分雪の登山は無理だろうと思われた。

しかし、最初から敗退するよりせめて途中迄でも登って、無理なら引き返しても良いではないかと思ひ直し心を決めた。

十八楼を出る頃は雪がちらついたり、青空に変わったりの空模様の中、一時間程で金鶏山南麓の駐車場に着く。

おそらくハシガミ林道への道だろう、真白な雪の中に二筋の真っ黒な轍の跡が印象的な風景を醸して絵を見るようである、その奥には薄っすらと、多分金鶏山であろう山の姿が覗え、次第に高揚し意欲が湧いてくる。



息子はスキーをやっていたので雪慣れをしているが、娘達はどうかなのか気になったが、言葉を掛

ける余裕もなく、スパッツを付けたたり、ストックの調整にもたもたして、最後部のグループの中に入れて頂き出発する。

後に息子等がついているので全く不安が無い、自分の体力に合わせて歩けば良いのだと、自身に言い聞かせながら歩を進める。

長い事、行仙宿の作業に参加出来ない程体力の衰えを感じる日が続いていたが、十二支会の連絡を受け取ってからの二か月は、我が家の近くにある「お城山」に努めて登るように心掛けた。

九十九折の石段を登り、松の広場、天守の広場をぐるりと回って歩く訓練を重ねたが、少しは効果に結びついているのだろうか。

時折木の枝に積もった雪が跳ね返って、頭から全身に雪を被せられ何事が起ったのかとびっくりさせられたが、これも雪山の洗礼だと思ふとまた楽しい。思っていた程の苦しさもなく、二時間弱で頂上に着く。

既に慶祝の準備がなされ、最後部の我々の到着を待っていた模様である。先ず三角点にタッチをして無事に登れたことを感謝をする。八十七歳二カ月、米寿を迎えて雪の金鶏山の頂上で、大勢の仲間に慶祝をして頂いた至福なるこの時を、絶対に生涯忘れてはいけなないと肝に銘じこんだ。

嬉しいことに司会者の計らいで、私が乾杯の音頭を取らせて頂くことになる、心を込めて「金鶏山登頂を祝福し、更に来年、再来年のあと二回の例会に、元氣にお会い出来ることを祈念して乾杯！」と声高く杯を天に捧げた。

帰路も最後部を歩く、案ずる事無く米寿の初登り、感動と感激の中に雪の金鶏山登山を終わらせて頂いた。

私等の慶祝をして頂いた十二支会会員の皆さん、又お世話をして頂いた日本山岳会岐阜支部の皆さん本当に有り難う御座いました。この場をおかりして厚く御礼を申し上げます。

以上